

追い出された  
万能職に  
新しい人生が始まりました vol.11

AUTHOR:

東堂大稀

ILLUSTRATION らむ屋



*Oidasareta*

*Banno-shoku ni Atarashii Jinsei  
ga Hajimarimashita*

## ステイード

サブマスター  
冒険者ギルド・アダド本部の副長。  
ロアや『望郷』と因縁があり……



## カラカラ

ロアを誘拐した妖精王。  
グレートダンジョン  
アダド地下大迷宮の支配者。



## グリおじさん & 魔狼の双子

戦闘や採取で活躍する  
ロアの従魔たち。

ブルー  
青い魔狼

レッド  
赤い魔狼



### クリストフ

苦勞人の斥候・剣士。  
外見は軽薄だが真面目。

### ★★★★望郷★★★★

ロアと親しくしている、  
ネレウス王国出身の  
冒険者パーティー。



### ベルンハルト

無口な魔術師。  
魔法の研究に熱心。



### コルネリア

盾役を務める、  
元気のいいツッコミ係。

### ディートリヒ

冒険者パーティー『望郷』の  
リーダー。仲間思いの剣士で、  
実はネレウス王国の王子。

### ロア

探究心豊かで気弱な少年。  
世界にただ一人の正式な  
『万能職』で、自覚はないが  
天才錬金術師でもある。

Main Characters

## 主な登場人物



# 世界地図

## ★★★ ロアを取り巻く人々 ★★★



### スカーレット

ネレウス王国の女王。  
グリおじさんと旧知の、  
長命な魔術師。



### ゲルト

戦闘狂の剣聖。  
ディートリヒに剣を  
教えた。



### エミーリア

コルネリアの姉で、  
近衛騎士団副長。



### コラルド

ロアの雇い主でも  
ある大商会の長。



### ブルーノ

ギルドに属さない  
変わり者の鍛冶屋。



### ピオンちゃん

ロアの従魔。  
『賢者の薬草園』を  
守る翼兎。



### イヴ

ネレウス王国の騎士。



### ダース

アダド帝国の  
元第三皇子。

#### 第四十五話 夢でたえたら

ここは……どこかの通路なのだろう。上下左右、石に囲まれた道がひたすら続いている。数人が並んで歩けるほど幅は広く、天井も高い。それなのに、言いようのない閉塞感が漂っていた。

「ルーとフィーはどうして来ないんだよ!!?」

怒号が響き渡る。その声も、通路の先へと消えていくだけだ。反響することはない。

へふむ、ダンジョンの中であることには違いないようだが……

石壁に風の魔法を当てて確認すると、グリおじさんは呟いた。石壁は傷付くこともなく、その性質からここがアダド地下大迷宮グレートダンジョンの中だと判断したようだ。

アダド地下大迷宮グレートダンジョンは傷付くことはない。古代の強固な不壊の魔法がかかっていて、たとえグリおじさんの魔法であつても破壊することは不可能だ。傷付けることができるのは、管理している存在が破壊を願った時だけだろう。

「何がへふむだよ!! 冷静気取ってんじゃねーぞ、害獣! ルーとフィーが取り残されてるんだぞ!!」

冷静に検証しているグリおじさんに、ディートリヒが叫びながら詰め寄った。  
ディートリヒだけが、怒りに任せて騒いでいた。他の者たちは落ち着いている。

今この場にいるのは、冒険者パーティー『望郷』のメンバーと、グリおじさん。一緒に行動していたはずの、魔狼ルビトワイの双子の姿はない。

彼らはずい先程まで、万能職の少年、ロアと会っていた。ロアは、ダンジョンの主あそびである妖精王カラカラに操られ、意思のない人形のような姿を晒さらしていた。だが、本物だ。

別の場所と繋がる空間魔法の『妖精の抜け穴』を通しての幻像だったが、間違いなくカラカラとロアは存在していた。

わずかな時間の邂逅かいこう。空間魔法が閉じ、ロアへと繋がる道が閉ざされる。

しかし、その時に、双子が予想外の行動に出た。

閉じかけた空間魔法を、無理やりこじ開けたのである。そして、望郷とグリおじさんに、開いた道を通してロアを助けに行くように指示した。

ディートリヒは、後から双子が来るものだとばかり思っていた。

なのに、双子は姿を現さなかった。ディートリヒは道が閉じ切ってしまったって初めて、双子がこの場に来ることがないと悟った。

「ちよっと、リーダー！」

「あの状況じゃ、無理だったんだと思うぞ」

コルネリアとクリストフが、肩を掴つかんでディートリヒを止める。二人は妖精の抜け穴に入る前に、

なんとなくこうなるのではないかと予測していた。

状況的に、双子ルビトワイの魔狼が、かなり無理をしていることはすぐに分かった。

通って来た妖精の抜け穴は妖精固有の魔法によるものであり、妖精王カラカラが作り出した魔法だ。使われる魔力の量も多く、魔法式も複雑であったに違いない。

それを再び開いたのだから、想像を絶する負担があったはずだ。一歩も動けない状態になったとしてもおかしくない。実際、最後に目にした双子は、かなり疲労している感じがあった。

予測していたのは、魔法に詳しいグリおじさんとベルンハルトも同じだったのだろう。双子の不在に動揺したのは、ディートリヒだけだ。

〈我は、周囲を探るのに忙しい。バカの相手はしてられん〉

ディートリヒに見向きもせずに、グリおじさんは吐き捨てる。ディートリヒが「すかしてんじやねえって言うてるだろうが！」と叫びながら、コルネリアとクリストフに羽交はがい絞じめにされて止められているが無視だ。今はそんなことより、優先させるべきことがある。

グリおじさんは周囲を調べる。魔力を広げ、念入りに調べていく。

「どう？ ロアがいる場所は分かりそう？」

「魔法の穴を抜けた先に、妖精王とロアがいると思ったんだがなあ……」

グリおじさんは、コルネリアとクリストフの言葉に耳を貸しつつも返答する余裕はない。目を閉じて集中し、繊細せんさいな作業をこなしていく。

この場の誰もが、妖精の抜け穴を抜ければ、そこにロアと妖精王がいるものだと思っていた。一

人と一匹の幻像が消えてからすぐに後を追ったのだから、抜けた先で対面できると思っていた。だが、ここには、ロアも、妖精王もいない。

〈妖精王は小心者で卑劣だからな。用心のために、別の場所を経由して幻像を送り込んでおったのだろう。ここは、その経由地であろうな〉

誰に向けるでもなく、自分に言い聞かせるようにグリおじさんは言う。

「じゃあ、ロアは別の場所に？ 無駄足？」

問い掛けながらもコルネリアの腕は、突進しようとしているディートリヒを羽交い絞めにしたままだ。

「へいや、妖精王の住処には近づいたと思うぞ。ルーとフィーの魔法は、我らにすら予想外であったからな。無駄な魔力を使って、中継地に遠い場所を選ぶことはあるまい？ 合理的に考えるなら、ここは我らがいた五十一層と妖精王が住む最下層との間のどこかであろうな〉

「最悪の場合でも、少しは前進したって考えてもいいのよね？」

〈おそろくな〉

自信家のグリおじさんが〈おそろく〉などという曖昧な言葉を使うのだから、本当にそれ以上のことは分かっているのだらう。コルネリアも、質問を重ねることはなかった。

「そんなことより、今はルーとフィーの心配だらう!! 二人つきりで置き去りになってるんだぞ! 可哀そうだらう!!」

しかし、我慢できないのはディートリヒだ。淡々と話しているグリおじさんに、盛大にキレた。

腕を振り回し、殴りかかろうとしている。

二人がかりで、しかもコルネリアは身体強化まで使って引き留めているのに、ディートリヒは引きずるようにしてジワジワとグリおじさんとの間を詰めていく。怒りに任せた火事場の馬鹿力としても、あり得ないほどの異常な力だ。

〈……まったく。バカの相手をしていられんと言っておるだらうが。うるさいやつめ〉

グリおじさんは、やっとディートリヒに目を向けた。

その目を見て、激昂していたディートリヒが動きを止め、息を呑んだ。

「……あんた……」

その目が、寂しげだったから。グリおじさんは、今まで見たこともない、光の消えた哀愁を含んだ目をしていた。

「ルーとフィーは我らをここに送り込み、自分の意志であそこに残ったのだ。小僧を助けるため、そうするしかない」と判断したのだらうな。ならば、我らはルーとフィーの望みに応えるため、全力を尽くさねばならぬ。我は、大事な者の心からの望みを裏切れぬ〉

平坦な口調で、グリおじさんは続ける。

「我が冷徹に見えるか？ 我は魔獣だ。貴様ら人間に、我の考えが理解できぬのは当然だ。だが、あのルーとフィーが……ルーとフィーが……」

言い淀むグリおじさんの雰囲気が変わった。澄んだ水面がいきなり沸き立つように、冷静な雰囲気から感情が溢れ出る。グリおじさんの目からキラリと光る物が流れ落ちたように思えたが、気の

せいだろうか。

「赤ん坊の頃から、私の索敵が届かぬ場所に行ったことがなかったのだぞ！ そのルーとフィーが自ら望んで！ 小僧のために！ あの場合に取り残される選択をしたのだ！！ その望みを叶えずにどうするのだ！！ 分からぬか!? 貴様ら人間には、分からぬであろうな！」

「……あ、ああ」  
ずいっと、グリおじさんはディートリヒに顔を寄せる。嘴と鼻先がくっつくほどに、近く。その表情は、一目で読み取れないほどに複雑なものとなっていた。

悲しみと、怒りと、後悔と、苦しみが混ざったような、表情。その表情こそが、今のグリおじさんの感情そのものなのだろう。

ディートリヒの頭が、一気に冷めていく。どんなに取り乱していても、自分以上に取り乱す者が出てくれば冷静になるものだ。

悲痛なグリおじさんの姿を見て、望郷のメンバーは頭の片隅で、この陰険グリフォンが「心からの望み」というものに弱いことを思い出していた。

「本当の冒険者」になりたいというロアの望み。その心からの望みを叶えるために、昔のグリおじさんは、明らかに自分より劣り、しかも嫌っている勇者パーティーの従魔として何年も過ごした。

結局、ロアが勇者パーティーから追い出されて解放されたが、この我が儘で傍若無人なグリフォンが、相当の我慢をしたのは想像に難くない。

それでもロアのためならばと耐えていたのだから、心からの望みに対しての拘りは余程のものだ

ろう。

「貴様のようなバカ相手に、時間を割いているわけにはいかぬのだ！ 我らに先への道を譲ったルーとフィーのために、小僧を助けに行かねばならぬ。小僧のあの姿を見たか？ 小僧を人形のように扱うなど、言語道断！ 早急に助けてやらねば。時間との戦いだ！！」

「……」  
いや、今まで鍛錬だと言っておれただけに敵を倒させたり、余計なイタズラを仕掛けて無駄に時間を使っていたのはあんただろう……。という言葉がディートリヒの喉まで出かけたが、さすがに空気を読んで呑み込んだ。

「うむ、急がねばならぬのだ。行くぞ！」

突然、寄せていた顔を引くと、また冷静な様子に戻ってグリおじさんが叫んだ。

「え？」  
ディートリヒを始めとした望郷のメンバーは、突然の変化に付いていけずに間の抜けた声を上げた。興奮したり、冷静になったりと、今のグリおじさんはかなり情緒不安定のようなのだ。

ロアがいなくなっただけでも無暗にイタズラを仕掛けたりと落ち着きがなかったが、双子と離れたことでさらに悪化しているらしい。落ち着きがないどころか、病的だ。

「行くぞと言っているのだ。何をしている。急げ。尻を突かれたいのか？」  
そう言うと、グリおじさんは望郷のメンバーには目もくれずに歩き始める。

「お……おう」

望郷のメンバーは頷き返したものの、しばらくは戸惑いから動けなかったのだった。

〈まずいまずいまずいまずい……〉

妖精王こと物作り妖精のカラカラは焦っていた。衝動的に行動し過ぎた。

薄暗い小部屋の中で同じ場所をクルクルと歩き回り、爪を噛んで……着ぐるみのようなモフモフとした手先を口に当てているようにしか見えないが……必死に自分を落ち着けようとしている。

グリおじさんに、面と向かってされた指摘は凶星だった。カラカラは達成感のなさから自身がロアの役に立っている実感が持てず、ロアに捨てられる未来が来るのではないかと恐怖していた。

その恐怖から判断を誤り、グリおじさんたちの前に姿を現すという失策を犯した。

一応、対策はしていた。五十一層に現したのは魔法で作った幻の姿だけで、直接出向いてはいない。

それでも、その幻の姿を見せるために妖精の抜け穴を繋いだのは失敗だった。もしものために中継点を挟んだが、失敗は失敗だ。

中継点にしたのはダンジョンの周辺回廊。ダンジョンを管理する妖精たちのための、作業通路のような場所だ。空間魔法を使う妖精たちしか出入りできない場所だが、カラカラたちのいる最下層とはダンジョンの壁一枚を隔てているだけだ。ダンジョンの壁はそう簡単に崩せるものではないが、あのグリフォンなら何とかしてしまうかもしれない。

今考えると、何故あんなことをしたのか、自分の行動ながら理解できない。

あの時はとても良い考えだと思えたのだが……。

自分は疲れているのだらうと、カラカラは思う。疲労が限界に達して思考が抑制が利かなくなっていたのだ。いわゆる『深夜高揚』と同種のものだ。一晩寝て次の日の朝に思い出すと、恥ずかしくて死にたくなる類いの思考だ。

カラカラはロアを迎え入れてから、疲労が蓄積していた。

主人のために物作りをして疲労することは、助手として作られたカラカラには喜びであるはずだった。だが、それも達成感を得てこそだということを思い知った。

達成感のない物作りは、無限の地獄に等しい。物作りに興味があれば、作業として割り切れたかもしれないが、物作りを喜びとするからこそ苦痛は深まってしまう。

もう少し、仕事量を減らしてくれば……。せめて、もう少し睡眠の時間が取れば……。せめて、ご主人様が超絶技量を見せつけなくてくれたら……。

〈……ダメだ！ そんなことを考えちゃ！ それよりも、あのワンちゃんたち!!〉

おもわず主人であるロアを批判しかけて、カラカラは慌てて思考を切り替える。ロアに疲労させられていたことが悪いのではなく、双子が使った魔法が原因だと思いついたことにした。

〈あれは……魔法の対消滅。本当に存在していたなんて……〉

一度閉じかけた妖精の抜け穴を再び開いた、双子の魔法。

いや、カラカラの知る限り、それは魔法ですらない。概念だけは知っている現象だ。太古の錬金術師が、理論上存在すると考えていた力。

相反する……例えば、火と水の魔法を、性質だけ変えた魔法式を使い、全く同じ魔力量で、全く同じ時に発生させ、衝突させれば発生すると言われている力だ。それは、空間を飛び出して異なる空間に影響を与えるという。

カラカラの前の主人は、太古の錬金術や魔法のことも研究していた。だからこそ、カラカラにもその現象の知識はある。だが、不確かな情報であるため、全知の木の記憶にも記録されていない。へいへいへい、あり得ないから！

大きく首を横に振ると、カラカラは叫んだ。

そんなことがあり得るはずがない。太古の魔術師が、高度な魔道具を使ってすら実現できなかった現象だ。相反する魔法を全て同じ条件でぶつけ合うなど、自然の生物にできるはずがない。非常識過ぎる。

きつと、似たような効果を示す魔法なのだろう。そう思い込むことにした。……そんな魔法を、カラカラは知らないが。

へとにかく！ もう、妖精の抜け穴は使えない。魔法の誤作動が怖い。妨害されて、外の世界に弾き飛ばされたら戻ってこれない。低位の妖精たちが隠れる程度の浅層の空間魔法なら、弾き出される程度だろうけど……。いや、空間魔法自体、もう危険かもしれない。慎重に使わないと。でも、それじゃ、ボクたち妖精の利点が……

カラカラはモフモフとした手先を嘯みながら、考える。双子の使う魔法がどんな影響を与えるか分からない。あらゆる事態に備えて、空間魔法は使わない方がいいだろう。

へ大丈夫かなあ？ このダンジョンも空間魔法をかなり使ってるんだけど……。壊されたりしないかな？ ああ、あの寄生虫グリフォンが近くまで迫ってるのに、切り札が自由に使えないなんて！

「あれ？ カラくん、どうしたの？」

不意に声が掛かった。カラカラが床に落としていた視線を向けると、目の前にロアが立っていた。「こんなところで、ウロウロ歩き回って」

へあ、いえ……

カラカラが慌てて周囲を見ると、そこは通路だった。人目につかない部屋の中を歩き回っていたつもりだったが、いつの間にか通路に出てしまっていたらしい。思考に没頭して、全く気が付かなかった。

「なんかブツブツ言ってたけど、面倒事？ 手伝わうか？」

へその……ああ、着替えられたのですね？

何と答えたらいいのかわからず口籠り、とりあえず目に入ったロアの服装について問い掛けた。

ロアはネレウス王国の学園の制服を着ていたはずだ。それが、普段の服に戻っている。

「あの服はかっちりし過ぎてて、動き難いから。やっぱりこっちの方が楽だよ。で、悩み事？」話題を変えようとしたが、変えられなかった。カラカラは少し思案してから、口を開いた。

へ……私の不徳の致すところなのですが……実は害虫が大事なところに入り込んでしまっています。どうやって駆除しようか考えていたのです

嘘は言っていない。あの寄生虫グリフォンたちをどうやって駆除しようか考えていたのだから、

間違いではない。

「そっか。虫除けは……この地下じゃ、追いつても逃げ場がないから戻ってきちゃうよね。じゃあ、殺虫剤か。食べ物なんかがある場所じゃ使えないけど、タナセタムから作った強力な魔法薬の殺虫剤があるよ。使う？」

「一体いつの間にそんな物を……」

カラカラはロアの作った物は一通り把握しているつもりだった。だが、知らぬ間に殺虫剤を作ったらしい。

カラカラはひそかにロアを配下の妖精たちに監視させていたが、ロアから依頼される仕事の手が回らず、人員……妖精員をそちらに割いたため、手薄になっているようだ。

「畑に行った時にタナセタムを見かけたから作ったんだよ。虫除けと殺虫剤は常備しとかないといけないから」

「そっか」

「屈託なく笑うロアに対し、眉間に皺が寄りそうになるのを、カラカラは必死に耐えた。ロアが忘れていないはずの記憶に係した発言だったから。」

除虫剤は殺虫剤の材料になる。乾燥させて燻すだけでも効果はあるが、魔法薬にすれば昆虫系魔獣にも効く毒になるためにダンジョン内でも育てていた。ちなみに、妖精にも虫的特徴を持つ者がいるが、昆虫系魔獣とは違って効果はない。

「殺虫剤の使い方には自信があるから、使うなら言ってね。虫除けと殺虫剤は、以前から色々の実

験してるんだ」

「そっか……」

誰のためにロアは実験を重ねてまで虫除けと殺虫剤に詳しくなったか。誰のためにその二つを常備していたのか。それを考えると、カラカラの心の内は暗く沈んでいく。

「……害虫には、殺虫剤か……」

ロアに聞こえない程度の声で、低く呟く。

害虫相手に、正々堂々と戦ってやる必要はない。……害虫は、ご主人様の知識で、死ねばいい。カラカラはロアには笑顔を向けたが、その心の奥は暗く淀んだ感情で満たされていた。

冒険者ギルドのアダド本部。

その奥まった位置にある部屋で、ギルドマスターは執務を進めていた。

「このギルドマスターは女性だ。一見、肝っ玉母ちゃんという単語が似合う、ふくよかな人物だった。」

アダドは軍国主義で、女性を下に見る傾向が強い国だ。だがそれでも、彼女はギルドマスターとして高い信頼を得ている。

彼女は事務机の上で、一心不乱に書類にペンを滑らせていく。

彼女が使っている桃花心木の事務机は、このアダド本部の象徴と言っても良い逸品だ。天板は下手な食卓よりも広く、いくつも処理待ちの書類が積み上がっていても余裕がある。厚みのある一枚

板で、余程の大木を材料として使ったのだろう、節のない木目が芸術的な文様を刻んでいた。

対面から見えないように板で隠されているが、足元も広々としている。ギルドマスターのような女性どころか大柄な男が脚を伸ばしたとしても、どこかに当たることもない。

それどころか、冬の日に足元に暖房器具を置いても邪魔にならないだけの広さがあった。

この事務机は、この初代ギルドマスターがアダド本部を立ち上げる時に、懇意にしていた錬金術師から贈られた物だった。

噂では、その錬金術師の手によって、ダンジョンと同等の不壊の魔法がかけられているという。噂を裏付けるように、重厚な事務机は長い年月が経った今でも軋み一つ上げることもない。破損どころか傷すら付くこともなく、現役で使われ続けていた。

静かな部屋の中、ひたすらペンで文字を書く音だけが部屋に響いている。その音は、見事な二重奏となっていた。

トントんと。不意に、ペンの音にドアをノックする音が混ざった。

「はいよ。入りな」

ギルドマスターが返事をする、ペンの音は止まる。

「失礼します」

ギルドマスターが顔を上げると同時に、一人の男性職員がドアを開け入って来た。

「なんだい？」

「軍の伝令が来ているのですが……」

職員の態度にただならぬものを感じて、ギルドマスターは人の好きそうな顔を少しだけ強張らせた。冒険者ギルドに軍の伝令が来ることは滅多にない。余程の事情がない限りは、互いに不干渉を貫いている。

ギルドマスターは頬の肉に持ち上げられて細くなっている目を、さらに細めた。まるで笑っているように見えるが、眼光は鋭い。余程の事情が出来てしまったらしい。

「いいよ、ここに通しな」

「はい！」

職員は短く返事をする、部屋から飛び出し、すぐに伝令らしい一人の兵士を連れて来た。

「それで、何の用だい？」

兵士の姿を見るや否や、挨拶もなしにギルドマスターは問い掛ける。

「……」

だが兵士は答えることはせずに、案内してくれた職員に意味ありげな視線を向けた。ギルドマスター以外に伝えられない内容だから、人払いをしろうということだろう。

「……失礼します」

察しの良い職員は、ギルドマスターが軽く頷くのを見てから退出した。

「それで？」

「軍よりの通達です。昨夜、重要犯罪者を宿屋街にて捕縛しました。特殊な事情があるため、拉致のような手段を採らざるを得ませんでした。このことに対して、軍は苦情を受け付けません。事情

説明等もできません。ご了承ください」

「なんで、うちに犯罪者の捕縛の話なんか……ああ、そうかい」

途中まで疑問を口にしてから、ギルドマスターは事情を察して納得したように頷いた。

このアダド本部は地下大迷宮グレートダンジョンに特化した冒険者ギルドである。護衛依頼すらほとんどなく、犯罪者の捕縛協力の依頼が来ることもない。

それなのにわざわざ伝令まで使って知らせてきたということは、その犯罪者は冒険者ギルドに関わっている人物なのだろう。

つまり、その犯罪者自身が冒険者か、もしくは冒険者の関係者だ。

もしその犯罪者に冒険者の仲間がいて、拉致同然の捕縛に抗議する場合。冒険者ギルドに協力を求める可能性が高い。ギルドが後盾になって苦情を言えば、軍でも安易に拒否できなくなる。

「それで？」

「軍は恩に報いる組織です！」

さらに問い掛けると、兵士は胸を張って叫んだ。上官からそうするように指示されたとは思えない、芝居がかった行動だった。ギルドマスターはそれを見て、わずかに口元を緩める。

軍は恩に報いる。

言葉の裏を返せば、報いるべき恩を軍に売ってくれということだ。

ギルドマスターは、考えを巡らせる。先程の通達と併せて考えると、「抗議の後盾になるな」ということだろう。

もし、冒険者ギルドが後盾になった場合。騒ぎは大きくなり、犯罪者の捕縛は広く知られることになる。

そうならないために先手を打ってきたということは、軍が知られたくない、隠したい理由がある可能性が高い。

「……そうかい。それは素晴らしいね」

こんな風に依頼をしてまで隠したい、よっぽどの事情があるんだろうね。……と、ギルドマスターは愛想笑いを浮かべながら考えた。

軍は冒険者ギルドと同じく、力が全ての組織だ。体面を重んじるため、冒険者ギルドに何かを依頼してやることは滅多にない。依頼があるだけでも、騒ぎになる。

だからこそ、こんな風に遠回しな依頼方法を取ったのだろうとギルドマスターは考えた。

「冒険者ギルドも恩には報いるよ」

「喜ばしいことです！」

これで交渉成立。苦情を言われても受け付けない、事情説明もしないと先に言われている。それに、軍の頂点はこの国の王である。どうあがいても、最終的にはギルドは黙らされることになる。

軍の頼みを受けて、それで得た利益を冒険者たちに還元した方が良くと判断して、ギルドマスターはこの遠回しな頼みを受けることにした。

「では、失礼します」

伝令の兵士は軽く頭を下げると、足早にギルドマスターの部屋から立ち去った。

しばらくして。ハアと、ギルドマスターは大きく息を吐いた。

「まったく、ここ最近はわけの分からないことが多いね。剣聖ゲルトの隠し子がやってきたと思ったら、黒幕からの手紙が来て、グリフォンがダンジョンに現れて、あげくに軍も変な動きをしてさ……」

眩きながら、ギルドマスターは椅子の背に身体を預けて大きく伸びをした。

「そう思わないかい？ ……こら、人が話しかけてるのに黙ってるんじゃないよ！」

そう言いながら、ギルドマスターは事務机の足元に、蹴りを放った。

「イテッ！」

同時に、野太い悲鳴が上がる。その声は、事務机の下から聞こえた。

ギルドマスターは身体ごと椅子を後ろに下げると、事務机の下を覗き込む。

「こんなところにいるのを許してやってるんだよ？ 相槌ぐらいちゃんとしなよ！」

「……へい、ママ……」

ギルドマスターが覗き込んだ先……事務机の下には男が潜んでいた。筋骨隆々の、髪に白い物が混ざった初老の男だ。膝を抱え、身体を丸めて床に座っている。

「まったく、建物が崩れるのが怖いからって、机の下に隠れてるなんて、子供じゃないんだからさ」

「すいやせん」

ギルドマスターに睨まれて、男は申し訳なさそうに丸めた身体をさらに小さくした。

この男。このアダド本部の副長である。名前はステイードだ。

「魔法建築のここが、そう簡単に崩れるわけがないだろう？」

「アマダンのギルドも魔法建築だった!! あそこが崩れたんだ!! こそも危ない!! 崩れたら、メモ用紙の地獄が……」

そう言って怯え、机の下のさらに隅に身体を寄せた。

ステイードは心の傷を抱えている。彼は、かつてペルデュ王国のアマダン伯領のギルドマスターだった。その時の失敗から、ペルデュ王国のギルド本部でひたすらハサミでメモ用紙を作る作業に従事させられ、精神に変調をきたした。

その結果、グリフォン、フィクサー、錬金術師、メモ用紙など嫌な記憶を呼び起こす言葉に怯えるようになってしまったのだ。

グリフォンも、フィクサーも、錬金術師も、メモ用紙も、単体なら問題ない。耐えられる。だが、その複数が重なり限界を超えると心の傷が刺激され、ギルドが崩れる! メモ用紙の地獄が!! などと泣きながら騒ぎ出すのだ。

昔は勇敢な冒険者だったのに、どうしてこうなってしまったのかギルドマスターにもよく分からない。そしてつい先日、条件が重なってその心の傷が発動してしまった。ギルドは崩れるから行きたくない。しかし、仕事をしなければメモ用紙の地獄に落とされる。妄想からそう思い込み、どちらも避けたいステイードは、解決策を模索した。

そして、不壊の魔法がかけられている、ギルドマスターの事務机の下に安息の地を発見した。不壊の魔法がかかっているなら、ギルドの建物が崩れても安全。しかもちゃんとギルドに来て仕事をしているのだから、メモ用紙の地獄に落とされることもない。そういった理屈らしい。

しかも、事務机は大きく、ステイードが下に潜り込んで十分な広さがあり、木の板を膝の上に置いて机代わりにして事務仕事することも可能だった。

唯一の問題は、ギルドマスターの足元に常にステイードが潜り込んだままになることだが、彼女は広い心でそれを受け入れた。とてつもない面倒見の良さである。

こうして、ステイードは怯えることもなく、事務机の下で仕事をするようになったのだった。

「……はああ……。これじゃ、相談相手にならないね。まったく、この街で何が起こってるんだらうね？」

ギルドマスターは再び大きなため息をつく。

それから手を伸ばして、怯えているステイードの頭を母親のように優しく撫で始めたのだった。

石造りの通路の中、ただひたすらに足音だけが響いていた。

「なあ、なんだか同じところをグルグルと回ってる気がするんだが？」

通路の中を、グリおじさんと望郷は進む。

先頭を進んでいるのは、グリおじさんだ。望郷のメンバーはその後ろをただひたすらに付いて歩いていた。

〈……………〉

グリおじさんは問い掛けてきたディートリヒを一瞥すると、無言のまま歩き続けた。

通路は長く風景がほとんど変わらない。曲がり角かどすらない一本道に見えるが、ゆつたりとした曲線を描いていることから環状になっているようだ。

「なあ、同じところを……」

〈うるさい！ 我は忙しい!!〉

再びディートリヒが声を掛けたが、グリおじさんはそれをバツサリと切り捨てる。

グリおじさんと望郷は、ただひたすら歩き続けている。もうかれこれ三時間以上は経っているだろう。なのにグリおじさんは何もせず、通路を進むだけだ。

「忙しいって、ただ歩いているだけだろ？ この壁の向こうにロアがいるかもしれないのに、何もしないのかよ？」

望郷のメンバーは疲労していた。もちろん、ただか三時間歩いていくくらいで疲れるような身体からだの鍛え方はしていない。疲れているのは、精神だ。

ただひたすらに続く道を歩き続けることは、精神を疲弊ひんぱいさせる。拷問ごうもんに近い。精神もそれなりに鍛えている望郷のメンバーだが、いい加減耐え切れなくなってきた。

〈……………準備が必要なのだ。我は今、ここを抜け出すために壁が薄いところを探している。いくつか見つけはしたが、最善を期したい〉

これ以上声を掛けられて邪魔をされることは得策ではないと考えたのか、グリおじさんは珍しく

素直に答えた。

「抜け出すためって、じゃあ」

〈貴様の考える通りだ。この道に出口はない。完全に他の場所から独立しておる。上下左右に時折薄い部分があるからな、妖精用の通路なのである〉

妖精は空間の魔法を使う。低位の妖精の力は弱い、それでも薄い壁であればすり抜けることができる。

この通路は妖精用であり、他者が入り込めないように出入り口は存在しない。壁や上下に低位の妖精がすり抜けられる程度の厚みの部分を作ることで、そこを出入り口にして移動しているのだ。

そして、本来であれば、たとえ薄くても迷宮の壁はグリおじさんにも壊せない。

何らかの手段を講じなければ、グリおじさんであつてもこの通路に閉じ込められたまま一生を終えることになる。

「それって、マズくないか？」

「閉じ込められたってことよね？ 食料と水はまだまだあるけど……」

クリストフとコルネリアの顔色が変わる。今までグリおじさんがいるからとどこか楽観的に考えていたが、予想以上に危機的状況だった。

〈だから、私は忙しいと言っているであろうが〉

フン、と鼻を鳴らすとグリおじさんは再び歩き始めた。望郷のメンバーは何も言えない。今まで以上にグリおじさん任せの状況に、不安と情けなさが入り混じる。

全員で顔を見合わせると、大きくため息をついて歩き出そうとした。

〈む？〉

歩き出そうとしたところで、グリおじさんが急に足を止めた。そして、周囲を探るように視線を這わす。

「どうした？」

その様子にただならぬ雰囲気を感じて、ディートリヒも周囲を警戒した。だが、何かがいる様子はない。

〈妖精王め、我を閉じ込めただけでは安心できぬようだな〉

「何かあったのか？」

〈揮発性の毒が撒かれたようだ〉

グリおじさんの一言に、場の空気が凍った。

〈妖精王が脅威に感じているのは、我だけだろう。さすれば、使う毒も我を殺せるだけの物。小僧ならば、その毒を作る知識もある。寝坊助、早く対処をせねば、貴様らなど一息で死ぬぞ〉

「お、おい！ 毒消しを！ 一番効くやつ！ ロアが持たせてくれたのがあるだろう!!」

ディートリヒが慌てて、魔法の靴を持ってきているベルンハルトに向けて叫ぶ。ダンジョン内では突然戦闘が始まることが多いので、荷物持ちは後衛の彼の役目だ。

ベルンハルトは焦る様子もなく、魔法の靴から四本の小さな瓶を取り出したが、〈我にもよこせ〉という声と共に一本はグリおじさんの風の魔法に奪われた。

実のところ、望郷が持つている中で一番効く毒消しは、超位の解毒の魔法薬である。大金で買うどころか、一国の王でも献上されるのを待つ以外に入手手段がないという希少な品物だが、望郷の魔法の鞆には全員分どころか、全員が数回使用してもまだ余るほどあった。

望郷のメンバーが持てる限りの知識だと、グリフォンに毒は効かない。そのグリおじさんが、自分を殺せる毒だと言っているのだから、猛毒中の猛毒。もしこの超位の解毒の魔法薬がなければ命が危なかった。

今更ながら望郷のメンバーは、ロアに感謝した。

〈これでしばらくは大丈夫だな〉

全員が魔法薬を飲み干すのを確認して、グリおじさんは呟く。

「ああ、しばらくはな」

それに答えたクリストフの声は重い。彼だけではなく、望郷の全員が暗い雰囲気纏っている。

当然ながら、ロアが作った魔法薬でも、効果はいずれ切れる。例外はない。効果が切れれば、超位の魔法薬は追加で飲むことができない。

魔法薬は無限に使えるわけではない。魔力が馴染みやすい魔獣は別だが、それ以外の生き物には使える限界がある。使い過ぎると『魔力酔い』という症状が出るのだ。そうなると、どんな魔法薬を飲んでも効果を失ってしまう。過剰摂取すれば、さらに最悪な『魔力中毒』を引き起こす危険すらある。

今はロアの魔法薬に命を救われているが、それも効果が切れるまでだ。

〈ふふ……〉

悲痛な面持ちの望郷のメンバーを眺め、グリおじさんは嘴を器用に歪めて笑った。

〈仕方があるまい。我が、貴様らを救ってやろう！ 大きな恩を売ってやる！ 感謝するがいい！ 翼を広げ、大げさな所作でグリおじさんは告げる。

〈我のような偉大な魔獣にとっても、いささか非常識で負担の重い魔法を使う。我にとつては秘術と言つてもいい魔法だ。貴様らを救う対価は、記憶！ これから起こることは全て忘れよ！〉

大仰な言い回しで、グリおじさんは言い放った。

グリおじさんが秘術とまで言う魔法。望郷のメンバーたちは無言で息を呑んだ。

「……それで、何をするつもりだよ？ 理不尽グリフォン」

〈絶対、小僧やルーとフィーには言うなよ。我まで非常識な真似をしたと知れば、増長するからな。教育に悪い〉

ディートリヒの質問には、まともな答えが返って来なかった。苛立つディートリヒは、グリおじさんを睨みつけた。

「何をするのかって、聞いてるんだがな？」

〈いかに貴様らの目を盗んで実行しようか悩んでいたのだ。私の秘密を握ったと、つけあがらせるわけにはいかぬからな。そうでなくても、貴様らは口が軽過ぎる。小僧にすぐに私の行動を告げ口する。実に、面倒なやつらだ。だが、毒が使われたことで、口止めが容易くなった。一時は、貴様らを気絶させた隙にやろうかとも考えていたのだぞ〉

そう言いながらも、グリおじさんはディートリヒの視線から目を逸らす。余程何をするかを言いたくないのだろう。若干早口で、誤魔化そうとする雰囲気は満々だ。

「だ、か、ら！ 何をするんだって聞いてんだよ!？」

さらに質問を重ねると、グリおじさんは覚悟を決めたようにディートリヒを真つ直ぐに見た。

「……ダンジョンの壁を壊す」

洪々といった響きがあつたものの、その声には強い意志が感じられた。

「……ふーん、じゃ、早く壊せよ」

「ダンジョンの壁を壊す」と宣言したグリおじさんに、ディートリヒはあっさりと言いつつ放った。さも、興味が無いという雰囲気だ。

「なっ！ 我が意を決して告白したというのに、なんだその気のない返事は!？」

「あなたが何に拘こわってるのかよく分からないけどな。勿体ぶちたつても意味ないだろ」

グリおじさんはディートリヒの態度に憤慨ふんがいして、前足で床を激しく掻かきむむした。

「いや、分かっているのか？ ダンジョンの壁を壊すというのは、それはそれは凄すごいことなのだぞ？ ダンジョンの壁は、上位の魔獣を塵ちり一つ残さぬほど焼き殺す魔法でも焦やげ一つ付かぬし、切

り裂く魔法でも傷一つ付かぬ。それを。それ、を、破壊すると言っているのだぞ？ 凄すごいことだと思わぬか？ さすがは我だと思わぬのか!？」

「いや、まあ、あなたならやりそうだと思うけど」

鼻息荒く興奮して話すグリおじさんに対して、素そっ気けない態度のディートリヒ。温度差が酷ひどい。

「……何が言いたんだよ……」

グリおじさんに詰め寄られて、ディートリヒは困惑した。

ディートリヒに魔法の知識はあまりない。知っているのは初歩のみだ。身近に凄腕すごての魔術師がいて、日常的に魔法を目にしていたおかげで一般人よりは知っているが、その程度だ。熱弁ねつべんされようが、その凄さというのがよく分からない。

例えば剣でダンジョンの壁を斬ると言われたら、非常識で凄すごいことだと思えたかもしれない。剣はディートリヒの専門の範疇はんちゆうだ。だが、魔法で壊すと言われても、できるならさっさとやれよと思えない。

「つまり、あなたは、自分は非常識だと言いたいのかよ？」

「我は普通だ！ 我ほど魔獣の常識を重んじる存在はない!？」

すでにその時点で理屈が破綻はたんしているよな。……と、望郷のメンバー全員が思った。グリおじさんが普通の魔獣だとは、誰も思っていない。

「じゃあ、常識的にできるんだろ？ 早く壊してくれよ」

「そうではないと、言っておるだろうが!？」

「……何が言いたんだよ……」

グリおじさんに詰め寄られて、ディートリヒは困惑した。

ディートリヒに魔法の知識はあまりない。知っているのは初歩のみだ。身近に凄腕すごての魔術師がいて、日常的に魔法を目にしていたおかげで一般人よりは知っているが、その程度だ。熱弁ねつべんされようが、その凄さというのがよく分からない。

例えば剣でダンジョンの壁を斬ると言われたら、非常識で凄すごいことだと思えたかもしれない。剣はディートリヒの専門の範疇はんちゆうだ。だが、魔法で壊すと言われても、できるならさっさとやれよと思えない。

「つまり、あなたは、自分は非常識だと言いたいのかよ？」

「我は普通だ！ 我ほど魔獣の常識を重んじる存在はない!？」

すでにその時点で理屈が破綻はたんしているよな。……と、望郷のメンバー全員が思った。グリおじさんが普通の魔獣だとは、誰も思っていない。

「じゃあ、常識的にできるんだろ？ 早く壊してくれよ」

「そうではないと、言っておるだろうが!？」

「……何が言いたんだよ……」

グリおじさんに詰め寄られて、ディートリヒは困惑した。

ディートリヒに魔法の知識はあまりない。知っているのは初歩のみだ。身近に凄腕すごての魔術師がいて、日常的に魔法を目にしていたおかげで一般人よりは知っているが、その程度だ。熱弁ねつべんされようが、その凄さというのがよく分からない。

例えば剣でダンジョンの壁を斬ると言われたら、非常識で凄すごいことだと思えたかもしれない。剣はディートリヒの専門の範疇はんちゆうだ。だが、魔法で壊すと言われても、できるならさっさとやれよと思えない。

「つまり、あなたは、自分は非常識だと言いたいのかよ？」

「我は普通だ！ 我ほど魔獣の常識を重んじる存在はない!？」

すでにその時点で理屈が破綻はたんしているよな。……と、望郷のメンバー全員が思った。グリおじさんが普通の魔獣だとは、誰も思っていない。

価値観が違うのだから、話が噛み合うはずがない。完全に不毛な話だった。ちなみに、魔法が専門のベルンハルトは、すでにコルネリアによって捕獲済みだ。

グリおじさんがダンジョンの壁を壊すと言った時点で、明らかに目が輝いていたので拘束された。放置していたら、今頃は早口で質問を並べたてて、さらに話が迷走したことだろう。

……まあ、拘束と言っても、手で口を塞いでジタバタと暴れるのを押さえ込んでいるだけなのだ。身体強化最強のコルネリアから、ベルンハルトが逃げ出せるはずもない。

〈すごい技術なのだぞ？ 我が大気中の魔力を集められるのは知っておるだろう？〉

「まあ、な」

グリおじさんは魔法で疑似的な魔道具を作り出し、大気中の魔力を集めることができる。それを自身の魔力として扱ったり、ロアたちに譲渡したりすることもできる。

おそらく、今現在、この世界で使っているのはグリおじさんだけの、とにかく、珍しい魔法だ。

当然ながら、望郷のメンバーはそのことを知っている。

〈あれの原理を利用して、ダンジョンの壁を壊すのだ〉

「じゃあ、別に特別なことじゃ……」

あれは、魔法知識の少ないディートリヒからしても変わった魔法だと思う。それでも、非常識を嫌うグリおじさんが普通に使っていたのだから、非常識というほどではないのだろう。

その原理を利用した魔法ならば、別に非常識ではないのではないか、とディートリヒは考えた。

〈特別だ！ あの魔法の原理は利用するが、あくまで利用するだけだ。……貴様にも分かるように

言つてやるならば……そうだな。貴様が木を切り倒したいとする〉

「なんだよいきなり。つうか、さっさと壁を壊せよ。毒消しが切れたら、オレたちは死ぬんだぞ？」

〈話を聞け！〉

どうやら、グリおじさんはこれから使う魔法が非常識だと納得させない限り、壁を壊す気がないらしい。望郷のメンバーは、大きいため息をついた。

へとにかくだ、貴様が木を切り倒したいとする！ その時に、斧おので切りつけて少しずつ木を削って切り倒すのが普通の魔法だ。しかし、我がこれから使うのは、斧で周囲の木の小枝を払って切り倒したい木の上に積み上げ、重みで木を折るようなものだ。ほら、非常識であろう？

「よく分からないんだが……」

困惑しているディートリヒの脇腹が、何かに強く押された。見ると、コルネリアとクリストフがディートリヒの脇腹を強めに突ついている。二人はゲンナリとした表情で睨にらんでいた。

それでディートリヒはやっと悟った。自分が納得したと言わない限り、この会話が終わらないというのを。

「……いや、分かった！ 確かにそれは非常識だ！ 分かったから、壁を壊し……」

〈分かったフリをして話を終わらせようとするな!!〉

ディートリヒが早々に終わらせようと適当に放った言葉を、グリおじさんが全力で否定した。非常に、面倒臭い。

「いや、バカリーダーが分かったって言ったんだからいいでしょ？」

「そうだぞ。バカリリーダーに本当に理解させることなんか無理だからな。バカだから。この辺りで納得してくれ」

「黙れ！ なげやりな言葉で終わらせるな。貴様らは、私の苦勞を分かかっておらぬ。貴様らは、私の苦勞を知るべきだ！」

会話の趣旨がすり替わっている。先程まで、非常識だ何だと言っていたはずだ。それが、何故かグリおじさんの苦勞話になっている。完全に、拗らせている。こうなったら、この捻くれグリフオンは他人の話聞かない。

「魔力を集める魔法は、昔の主人のために作った。だが、これから使おうとしている魔法は、少し違う。マークの体質を再現してみようと思つて、発展させたものだ」

「マークというのは、伝説の姫騎士アイリーンやグリおじさんたちと共に旅をした剣士である。彼は、抗魔法体質という、魔法を無力化させる体質だった。」

「あれ？ じゃあ、マークさんもダンジョンの壁を壊せたの？ ……つて、失言だったわ、忘れて」

「コルネリアは思わず尋ねたが、言ってから後悔した。話が長くなる切っ掛けを与えてしまった。」

「いや、私の魔法とマークの体質は違う。実際のところ、私の魔法でマークの体質を再現することは不可能だったのだ。私の魔法では、マークのように発動してすぐの魔法や、動いている魔法を消すことはできなかった」

「はあ……そうなのね」

「コルネリアが危惧した通り、グリおじさんが語り出した。大切なことは何も言わなくせに、こういう時には饒舌なのがグリおじさんだ。」

「私の魔法は大気の魔力を集めるのと同じく、その場の魔力を吸い出して魔法を無効化させる。要するに、魔法を劣化させられるわけだ。時間はかかるし、効果範囲も狭い。さらには、大気から集めるのと違って負荷が大きく、吸い出す魔力よりも使用する魔力の方が遥かに多い。戦闘中など、移動している物に使うには不向きであるし、使ったところで意味のない魔法だ。せいぜい、建物など、長時間動かぬ物にかけられた魔法を劣化できる程度だな」

「グリおじさんは、悔しそうに言った。」

「その逆で、マークの体質は、時間もかからず動いている魔法も瞬時に消せるが、魔力が複雑に絡み合い定着した魔法だと効果が薄い。長時間同じ場所に留まれば影響を与えられるのかもしれないが、短時間ではほとんど効果はないであろうな。実際、あやつがダンジョンに入っても、壁などには何の変化もなかったからな」

「つ、つまり！ グリおじさん様の魔法は、物体に魔力を染み込ませる強化系魔法に有効で、マーク様の体質は無効ということですね！！ マーク様は空間魔法は消せたということですから、物体と非物体の違いに原因が……ふがっ!!」

「大人しくしてて！」

「コルネリアの腕からベルンハルトが抜け出すと、グリおじさんに質問を浴びせた。失言に意識を取られ、押さえ込む力が緩んでしまったようだ。」

しかし、すぐにまたコルネリアに拘束されてしまう。もちろん、口も塞がれた。強化系魔法とは、物体を強化する魔法全般を指す。

一番使われているのは、魔法建築に使う建材や物品などを補強する魔法。ダンジョンの壁も、強度の差こそあれ、これに含まれる。それと、コルネリアが現在使っているような肉体強化の魔法も定番だ。それ以外にも色々あるが、代表的なのはこの二つだろう。

「そうだ。私はマークの体質を再現しようとして、効果が真逆の魔法を作ってしまったわけだな。建物の強化魔法を消すだけなど、ほとんど意味のない使えぬ魔法となってしまった。建物など、我ならそんな魔法を使わずとも破壊できるし、使用魔力を考えれば使うだけ無駄だ。ダンジョンの壁を崩せると言っても、分厚い外壁は私の全魔力を使い切っても無理だしな。割に合わぬ」

「ああ、そういうことか」

クリストフが呟く。グリおじさんのこの言葉を聞くまで、なぜそんな便利な魔法があるのに、このダンジョンに来た時に、正式な手順での入場に拘<sup>こた</sup>わっていたのか気になったのだ。ダンジョンの壁を壊せるのなら、最初から手順など踏まずに外壁を壊して入り込めば良かったのにと。

だが、分厚い外壁は壊せず、内部の薄い壁なら壊せるということなら、納得はいく。

「本当に役に立たぬ魔法だと、当時の我も思ったが……私は創意工夫と鍛錬で、この魔法を意味があるものに昇華したのだ！」

グリおじさんは、胸を張った。やけに偉そうだ。

「今では、魔法建築の建物なら、自由自在に崩せるのだぞ。崩れるまでにかかる時間も思うがまま

だ！ さらには、魔法を使っていることを周囲に気付かせない方法まで身に付けたのだ。私の苦勞が分かるか？ 素晴らしいであろう！」

グリおじさんは自慢げだ。鼻息も荒い。グリおじさんの言葉を聞いて、望郷のメンバーは一瞬だけ考えると、ほぼ同時にとあることに思い至った。

「冒険者ギルドを崩したのは、それか!!」

口を塞がれているベルンハルト以外の、望郷のメンバー三人の叫びが重なった。

アマダン伯領の冒険者ギルド崩壊事件。

望郷のメンバーは、犯人がこの性悪グリフォンであることは知っていたものの、どういう手段を使つて崩したかまでは分からなかった。どうせ悪質な魔法を使ったのだと思つてはいたが、ここに来てその正体が知れたわけだ。

思わず叫んだが、その後に全員が苦々しい表情を作る。

グリおじさんは、役に立たないと思われた魔法を、時間と手間をかけて使えるものにした。ただ、思い通りに建物を崩すためだけに。

「てめえのその性根が非常識なんだよ！」

「何がだ！ 我が非常識など、あり得ぬ！」

「その魔法は、どうせ、イタズラと嫌がらせのためにしか使つてないんだろうが！ 時間差で壊したり、隠れて壊したりする理由なんか、それしかないからな!!」

「そのどこが非常識なのだ!？」



イタズラと嫌がらせにしか使えない魔法を、時間と手間をかけて作る。どう考えても、非常識だ。本当に、この悪質グリフォンは、他人に迷惑をかけることだけに手間を惜しまない。

〈役に立つ魔法だぞ!? 何が悪い? 何が非常識だ? この旅でも、存分に役に立ったのだぞ!〉

「……………うわぁ……。最悪なことを自白しやがった。この性悪グリフォン……」

嫌悪感を丸出しで言うてから、クリストフは頭を抱えた。

「グリおじさん! 旅の途中で片っ端から建物が壊れるようにしてたとか、言わないわよね!? 言わないでよ!」

コルネリアの絶叫が響く。この旅で存分に役に立ったということは、旅の途中で建物が壊れるように仕掛けまくったということだ。

〈何か問題があるか?〉

「やめてよ、もう……」

コルネリアは、崩れるように座り込んだ。

解放されたベルンハルトが輝くような笑顔でグリおじさんに話しかけようとしたが、即座に、今度はクリストフによって拘束された。

「最低だな! 住民に被害が出るだろうが」

〈アタの住人であろう? 同罪だ。小僧を誘拐した罪は深いぞ〉

「関係ないだろ!」

グリおじさんは悪びれる様子すらない。むしろ、何が悪いのかすら分かっていない。

こういうところだけ、魔獣らしいんだよな。……と、ディートリヒは睨みつけながらギリギリと奥歯を噛み締めた。

「よし！」

吹っ切るように、ディートリヒはグリおじさんの首元を蹴りつける。ブーツの底を押し付けるような、体重を乗せた蹴りだ。

〈何をする！〉

「ロアに全部、伝えるからな！」

〈何!?!〉

ディートリヒの宣言に、グリおじさんは途端に慌て出した。悪いと思っていなくても、ロアに知られたら叱られるようなことをやったという認識だけはあるらしい。そもそも、そうでなければ隠れてやるはずがない。

「ただ、猶予はやる。言われたくなきゃ、態度で示せ」

〈何だと!? また我を脅すつもりか? 何をやらせる気だ!〉

ブーツの底をグリグリと押し付けながら、凶悪な表情で睨みつけるディートリヒ。その視線を受け、上目遣いの恨めしそうな目でグリおじさんは睨み返した。

ちなみに、ディートリヒは数日前に、ロアの名前を使って脅すことを控えるように仲間にかけていたが、どう見ても命がかかった非常事態なのだから誰も口を挟まない。

「ダンジョンの壁を壊せ。さつきから言ってるだろう。とつととやれ！」

〈……………〉

グリおじさんは、嘴を固く閉じて文句の言葉を呑み込んだ。

そもそも、このわけの分からない会話も、ダンジョンの壁を壊す話から始まった。やる予定だったことを、やるだけだ。脅されている今、言い返せるはずもない。

グリおじさんは無言のまま、魔法で疑似的な魔道具を作り出す。やっと、ダンジョンの壁を壊す作業が始まったのだった。

ダンジョンの壁が崩れる。

崩れた破片が土埃を上げ、周囲が一瞬真っ白に煙った。崩れて空いた穴は、人間が通れるほど。ちょうど、扉一枚程度の広さだった。

「げほっ……」

舞い上がった土埃が晴れると、そこから人影が現れる。ディートリヒだ。

崩れた壁を潜り、咳をしながらも、剣を片手に素早く躍り出て周囲を警戒する。

「げほっ」

「ケホッケホッ」

続いてクリストフとコルネリアが飛び出すと、ディートリヒの脇に並んだ。

「ごほっ」

さらにベルンハルトがその背後に出てくる。彼もまた咳き込みながらも、いつでも魔法を使える

ように控えていた。

〈待ち受ける敵は、おらぬようだな〉

最後に潜ってきたのはグリおじさんだ。グリおじさんはさすがに咳き込んではいないものの、疲れた表情をしていた。

グリおじさんが壁の穴を通り抜けると、背後で崩れた壁の破片が動いて穴を塞ぐ。グリおじさんの土魔法だ。

壁の向こう……望郷とグリおじさんが今までいた場所に満ちていた毒が、この場に流入してくるのを防いだのだった。

望郷のメンバーは咳き込みつつも周囲の安全を確認し、やっと剣を下ろした。

彼らが咳き込んでいるのは、舞い上がっている土埃のせいではない。今までいた通路に満ちたガス状の毒の影響だ。

毒消しを飲んでから時間が経ったことで、徐々に効果が弱まっている。敏感な喉や鼻に、影響が出ていた。それでもロア特製の毒消しの魔法薬は強力で、新鮮な空気を吸い込むと、感じていた痛みは即座に消えた。

「時間かけ過ぎだ、害獣！ 毒消しが切れて死ぬんじゃないかとヒヤヒヤしたぞ！」

咳が収まると同時に、ディートリヒはグリおじさんに向かって叫んだ。

グリおじさんがダンジョンの壁を壊し始めてから、すでに数十分が経過している。グリおじさんであっても、この作業にはそれだけの時間が必要だった。

ダンジョンの壁を壊すのは、普通の魔法建築の建物を壊すのとはわけが違う。使われている強化魔法の質が違うからだ。

魔法建築の建物を壊すのを、樽たるから桶おけで水を汲み出す行為たどに喩えるなら、ダンジョンの壁は樽ごとと凍った水を砕きながら溶かして盃さかで汲み出すのに等しい。難度が段違いだ。

〈強引に魔法を使って、魔力切れになるわけにはいかぬのでな。死ななんだのだから、よかろう？〉  
グリおじさんは、悪びれもせずに返した。

「そりゃまあ、そうなんだろうけどな！」

〈ならば、よかろう〉

グリおじさんが魔力切れになれない理由は、ディートリヒたちも分かっている。

さすがのグリおじさんでもダンジョンの壁の向こう側の索敵はできず、どんな魔獣が待ち構えているか分からないからだ。もし、望郷が絶対に勝てないような強い魔獣が待っていたら、それこそ妖精王のような凶悪な魔獣がいるなら、頼りはグリおじさんしかない。

壁を抜けた途端に戦闘になって、グリおじさんが魔力切れで戦えなければ即全滅だ。

とはいえ死にかけたのだから、ディートリヒたちが文句の一つも言いたくなるのも仕方ないだろう。

〈私の魔力の残りは、三分の一程度。妖精王を相手にするには心許こころもとない。少しここで休んで回復するぞ〉

「そうだな。オレたちも死にかけたしな。ちょっと気を落ち着けたい」

グリおじさんの提案をディートリヒが受け入れると、他のメンバーから安堵の息が漏れた。凶太い神経の持ち主のディートリヒですら、気を落ち着けたいと思う状況だ。他のメンバーもかなり疲弊していた。

「それにしても、ここは畑か？」

探知の魔法と目視で、敵の有無を再確認していたクリストフが呟いた。

そこは、ダンジョンには似つかわしくない畑だった。キレイに作られた敵が並び、そこに青々とした植物が生い茂っている。それも、かなり広大だ。天井から光が降り注いでいる大空洞に、見渡す限り畑が広がっていた。

「葉草畑ね」

コルネリアは、植えられている作物が、ロアの家で見慣れた物だと気が付いた。

今までは希望的観測のみで、ダンジョン最深部に近付いていると考えていた。だが、こうやって葉草畑があるということは、最深部に近いのは間違いないだろう。居住区から遠く離れた場所に、畑を作るはずがない。

〈葉草畑か。意外と、小僧が望んで作らせたのかもな〉

グリおじさんが口元を緩める。懐かしい物を見たような、そんな表情を浮かべていた。確かに、ロアならダンジョン内でも葉草畑を作らせることもあり得るだろうと、全員が同意した。

青々と茂っている様々な葉草を眺めながら、しばしの休息をとるグリおじさんと望郷のメンバー。ここは敵の本拠地の近く。いつどこから敵が攻めてくるか分からない場所だ。なのに、畑の風景

を眺めていると、心が休まってくる。

今にもどこかの通路からロアがジョウロを片手に歩いてきそうな、そんな予感さえしてしまう。

非日常的な空間に紛れ込んだ日常的風景に、心を癒された。

そこに、風が運んでくるのか、柔らかな甘い香りが混ざり始めた……………。

……ディートリヒは地面に座り込んで、水袋から水を飲んでた。身体を休めながらも、警戒は怠っていない。気を緩めてもいなかった。

なのに、何かが近付いてくるのを、目前まで気が付かなかった。

「!? ルー? ファー!!!?」

近付いてきた者に気付いて、ディートリヒは水袋を投げ捨てて立ち上がる。心配していた相手に無事に出会えたのだ。最高の出迎えをしなくてはいけない。

跳ねるように走り寄ってくる双子。顔は喜びに満ちていて、輝く目は真っ直ぐに彼を映していた。ふわふわとした赤と青の毛は輝き、動く度に光の粒子を撒き散らす。

今にも飛びついてきそうな双子の魔狼を、ディートリヒは大きく両腕を開いて迎えた。

双子は開いた腕の中に飛び込むと、身を預けてくる。ギュッと抱きしめるディートリヒ。幸せな重みと柔らかな毛並みを感じて、ディートリヒは歓喜に震えた。

不意に、腕に感じていた重みが軽くなる。首に、何かが……女性の腕が回される。白く細い、折れてしまいそうな腕。吸いつくような肌の感触に、首元が覆われる。

目の前には、女性の赤い唇。

白い肌に浮き上がるような鮮烈な赤。煽情的な潤いを帯びている。視界の端に揺れる、銀色の髪。見据えてくる、銀の瞳。

ディートリヒの唇と、赤い唇が重なり合った。

途端に、唇に痛みが走る。女性が、彼の唇を噛んだのだ。甘えた噛み方ではなく、本気で、肉を噛みちぎるように。だが、ディートリヒは表情を変えることすらしない。いつものことだ。痛みも、流れる血も気にならない。ディートリヒは自分の血の味がする舌を受け入れた。

……コルネリアがその存在に気が付いた時、頭を抱えた。

「なんでここにお姉様がいるのよ!？」

薬草畑の中に立っているのは、コルネリアの姉のエミーリア。やけに熱っぽい視線を向けてきている。身体を意味深げにくねらせ、珍しく女性的だ。

「マズい……。どう見ても欲情してるよね、お姉様!？」

悲鳴に似た叫びを上げる。彼女は身の危険を感じた。

コルネリアが、実の姉であるエミーリアの嗜好を知ったのはつい最近。アダド帝国の艦隊にネレウス王国が攻められた時のことである。

エミーリアは男性より女性の方が好きらしい。多くの女性を周囲に侍らせるのが理想だと語っていた。

今まで姉妹にしては皮膚接触がちよつと多めだとは思っていたが、コルネリアもまたその愛玩対象だった。一応は倫理的に不味いと思ったのか、『観賞用』にして手は出してこないつもりらしいが、そうは言われても身の危険を感じてしまう。

ゆつくりと、近付いてくるエミーリア。

「だめ！ 動けない。なんで、腰が抜けて……」

コルネリアは必死で逃げ出そうとするが、身体が思うように動かない。這うのがやつとだ。段々と、エミーリアが近付いてくる。いつもと変わらない優しい笑みを浮かべているのに、恐怖を感じる。

「お姉様！ お願い！ やめて!！」

コルネリアの必死の叫びが空しく響いた。

……クリストフは、探知魔法を使いながら座り込み、畑の風景を見つめていた。はずだった。

だが、気付けば、背中に人肌の温かさを感じた。

「誰だ!？」

望郷のメンバーに、こんなことをする者はいない。慌てて振り返ると、艶やかな黒髪の美女がクリストフの背中を抱くようにして立っていた。猫のような大きな目で、褐色の肌が魅力的だ。

誰だっただろう？ 昔の知り合いの気がする。……と、記憶を探れば、子供の頃に憧れていた海賊船の女性船員だった。豪快な性格で、笑顔が魅力的な子供に優しい人だった。

いわゆる、憧れのお姉さんというやつだ。クリストフの初恋の相手である。顔を見てもすぐに思い出せなかったのは、その頃の彼は胸ばかりに興味を持つエロガキだったからだろう。

子供の頃のクリストフは、強く胸を押し付けて抱きしめてもらいたいと思っていた。

「これは、夢か？」

間違いない夢だ。しかし、どうして今更、子供時代に憧れていた女性が夢に出てくるのだろうか？ そもそも、自分はいつ寝たのか？ 不思議に思ったが、その考えもすぐに、背中に当たる柔らかい感触の前に吹っ飛んだ。

「まあ、夢ならいいか」

背後からクリストフの胸に回される手。指先が、優しくシャツの中に忍び込んでくる。クリストフは、抵抗せずにこの夢を楽しむことに決めた。

……ベルンハルトは、葉草畑に立つ人影を見て眉を寄せた。

立っていたというのは、少し語弊がある。正しくは、立ったり座ったり……屈伸運動をしていた。目の前にいるのは、コルネリアだ。なにやら鼻息荒く身体を鍛えている。今度は腕立て伏せを始めた。困ったことに全裸だが、色気は全くない。その姿を見つめながら、ベルンハルトは少しだけ考える。

「母上でなくて良かった」

やけに奇妙な感想を漏らした。

「これは、精神操作系の魔法ですか。性欲を刺激しているのでしょね」  
彼は冷静に分析を始める。

ベルンハルトの推測が正しいなら。彼らは今、性欲を利用した幻覚を見せる精神攻撃を受けているはずだ。ベルンハルトの場合は欲情する対象がないので、苦肉の策で身近な女性を登場させたのだろう。

だからこそ、彼は最初に「母上でなくて良かった」と呟いたのだった。さすがに、母親の全裸姿は見たくない。別の意味で精神攻撃になってしまう。

ベルンハルトは思う。自分を誘惑するなら、珍しい魔導書でも登場させればいいのにと。人間を誘惑する魔導書などという存在が、幻覚でも容易に作り出せるとは思えないが。

「さて、何もしなければグリおじさん様に怒られますね。自力で解けるか試してみますか」

呟きながらも、ベルンハルトの表情は輝いている。性欲を利用した珍しい精神操作系の魔法。それにかかった状態で分析できるのだ。滅多にできる経験ではない。ベルンハルトは鼻歌を歌い出さないのが不思議なほど、楽しげに分析を始めた。

……グリおじさんは、目の前に立つ人物を見て目を見開いた。

「かあさま……」

子供のような、小柄な女性。高く尖った大きな帽子が、幼さを強調している。少しでも身長を高